



不妊外来 1年以上通院者の挙児達成率は79.4%

不妊外来を受診して治療を行い、最終的に赤ちゃんを手にする方はどれくらいいらっしゃるのでしょうか？人工授精、体外受精などの治療法別の1回実施あたりの妊娠率はよく発表されています。しかし患者さんにとって最も知りたいのは、あらゆる治療法を含めて、最終的に自分が何パーセント妊娠できるかではないでしょうか。こうしたデータは調査が困難なこともあり、あまり発表されていません。

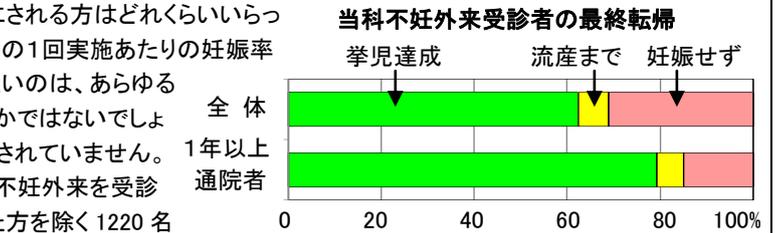
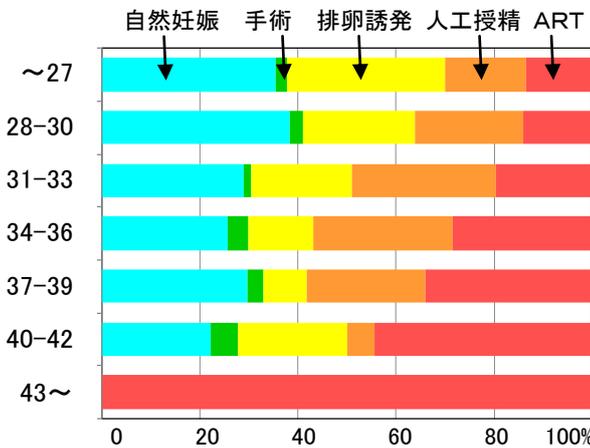
今回、2001年から2009年の9年間に挙児希望にて当科不妊外来を受診された1357名のうち、初診2か月未満で受診されなくなった方を除く1220名の最終転帰を完全分析、1) 挙児を達成 2) 妊娠はしたが流産等に終わる 3) 1度も妊娠せずの3通りに分類しました。

右上図のように、全体の1220名のうち762名(62.4%)が挙児を達成、79名(6.5%)が流産まで、妊娠しなかったのは379名(31.1%)でした。しかし、挙児を達成できなかった方々の中には少し通院しただけで止めてしまった方も大勢います。そこで、初診から1年未満でドロップ・アウトされた方を除いた960名で再度計算しますと、挙児達成率は79.4%となりました。不妊治療には成功まで時間がかかる場合も多々あります。治療を始めたら、ぜひ最低1年はお付き合いいただければ幸いです。

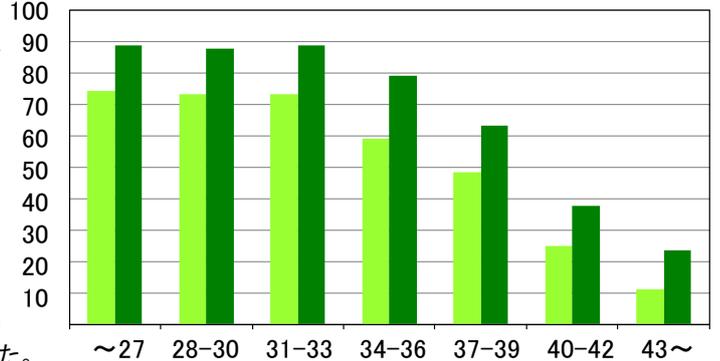
治療成績は当然年齢と強く関連します。そこで、初診時の年齢を3歳ごとに区切って挙児達成率を分析し、右下の図に示しました。

全体の集計および、1年以上通院者の集計ともに33歳までは高い数値が出ていますが、34歳以降低下が始まり、37歳以降でグンと低下することがわかります。34歳を過ぎたら、なるべく早めに妊娠をトライし、妊娠しにくいと感じたら、早期の受診が勧められます。

年齢群別にみた出産に至った治療法の比較



年齢群別の挙児達成者の割合(薄緑:全体、濃緑:1年以上通院者)



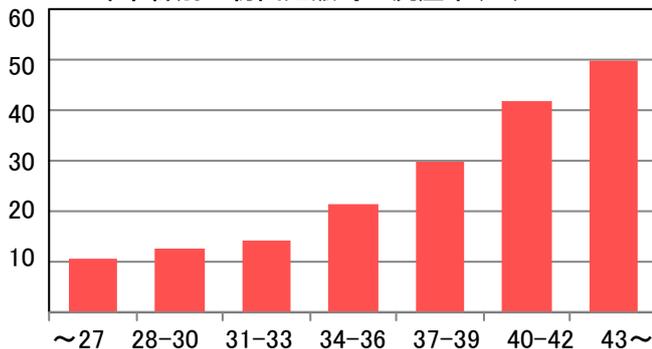
ここで、1年以上通院者では37-39歳でも63.2%が挙児を達成し、40-42歳で37.5%、43歳以上でも23.1%となっています。やはり「継続は力なり」です。

なお、1人子供がいる方は1人もいない方より全体で3%挙児達成率が高いですが、各年齢群ともほぼ同じ差で有意差はありませんでした。

出産に至った治療法は、自然妊娠(排卵のタイミングチェックや、卵管造影後を含む)が31.5%、内視鏡などの手術後が2.8%、排卵誘発が20.2%、人工授精が24.0%、そして体外受精、顕微授精、凍結胚移植などARTが21.5%でした。これを年齢群別にみまると、左図のように30歳以下では、自然妊娠や排卵誘発が多くなっています。31歳を過ぎると人工授精の比率が高まり、37歳を過ぎるとARTが最多となり、40-42歳では44.4%、43歳以上では生児を得た妊娠はすべてARTによるものでした。当院は何でもすぐARTに走るのではなく、可能な方にはなるべく自然に近い方法で妊娠していただくことを基本方針としています。しかし、37歳を過ぎたら早めにARTに移行することも考慮すべきかもしれません。

妊娠後の第2のハードル:流産

年齢群別の初回妊娠時の流産率(%)



不妊治療で(不妊治療でなくても)妊娠が成立したあと、私たちの前の立ちちはだかるもう一つのハードルがあります。それが流産です。

左図は今回集計した1220名のうち、妊娠が成立した841名の最初の妊娠の流産率を年齢群別に示したものです。一般に妊娠全体の15%が流産に終わるとされています。33歳以下ではこの15%より低率ですが、34歳以降増加し40歳以上では40%に達します。

高齢の方が残念ながら流産された場合、この高い流産率という事実を認識し、必要以上に落ち込まないことが大切です。反復する流産に対して“tender loving care”という概念があります。すなわち周囲が温かくサポートし、本人が前向きになることで、次の流産率が減るといいます。高齢の方の流産は、大半が卵子の染色体異常に起因する胎児の異常によります。この場合妊娠の早い段階での流産となるので、特別な処置も要りません。早く気持ちをリセットし、前向きに次の妊娠に取り組めば、良い目が出る可能性も十分あるのです。